

# キムチと私

## 在日コリアン女性の複雑な胸の内



朴 君 愛

◎プロフィール  
一般財団法人アジア・太平洋人権情報センター  
（愛称 ヒューライツ大阪）企画業務グループ上  
席研究員。大阪生まれの在日3世。大阪外国語  
大学（現、大阪大学）朝鮮語学科卒業。大学時  
代に民族差別撤廃をめざす地域活動に出会う。  
1994年の財団設立以来、勤務し現在に至る。  
近畿大学非常勤講師。

キムチが身近にあり続けたが：

私の二世の両親は、コリアンであることさえ面と向かって子どもに言えなかったが、八〇歳を超えて、ますますキムチ無しには食が進まないよ

うだ。母は現役でキムチを漬けている。父はキムチを漬ける術を知らず、食べるだけである。かくいう私は、実はキムチが苦手である（辛いもの全般がダメなので、キムチを「差別」していいと言いつつ）。

日本産唐辛子—いわゆる「たかのつめ」を使ったキムチは

特に辛い。キムチを食べられないことが、民族的自覚がないと言われそうに相手を選んで言ってきた。「朝鮮人はかくあるべし」みたいな強迫観念にかられていたのだ。

### 「玉の輿」はおいしいキムチを作らせてこそ

一九八〇年代、二〇代になって韓国を訪れた。キムチを筆頭に辛い料理はほぼアウト

だから道中は胃腸がひっくり返った。現地ガイドさんに気に入られ、「日本で差別されて苦労することはない。韓国で玉の輿に乗れる見合い話を紹介するから」と真剣に提案された。キムチが食べられない、言葉にも不自由する私に

韓国で見合いするなんてありえない選択だった。とっさに出た言葉が「キムチを漬けれないし、無理です」であった。漬けるどころか食べられないのだが、ガイドさん曰く

化した日本に暮らすコリアンもまた日本人同様に共同体が崩壊しつつあり、家族文化が変わってきている。世代間ギャップは日本以上に激しいかもしれない。そしてキムチは

で尊重され、権利を主張できることを知った。そうすると

自分をとりまく社会の壁は、民族差別だけではなく、女性差別もあるということに敏感になってきた。また女性差別撤廃条約を政府に締結させようとする運動に勇気をえた

（韓国は一九八四年、日本は一九八五年に批准）。しかし性平等社会の実現は、依然日本と朝鮮半島に共通する大きな課題であり、在日社会も同様（より厳しいという説も）である。私は、男尊女卑意識の強かった父親に反発をした



母の手づくりきゅうりのキムチ

し、親戚の家で行う儒教式の法事（チエサ）の極端な男女役割分担にも違和感を覚えた。法事を含め冠婚葬祭には女性たちが動員されて、キムチやら朝鮮料理を大量に作っていた。そうした行事に対する私の眼差しには、「日本より劣ったコリアン文化」として差別意識を内面化した部分があったことは認める。そうであったとしても在日社会の家父長意識が、女性たちの人生を息苦しくしてきたことも事実である。我が家は、長男の家ではなかったし、娘二人の核家族であったこともあり、キムチはおろかほとんど料理をせずにごちした。日本人と結婚したが、自分の親戚の「嫁」になるよりははるかに負担が少なかった。

### 今、在日コリアンの食文化を記録しなければ

あれから数十年…高度産業

化した日本に暮らすコリアンもまた日本人同様に共同体が崩壊しつつあり、家族文化が変わってきている。世代間ギャップは日本以上に激しいかもしれない。そしてキムチは

一方、周囲の二世の女性たちは、手作りをやめて買って食べる人が増えている。高齢化によりキムチ作りがづらいし、家族も少なくなり、食事の好みも多様化したのだという。母は、スーパーで売っているのは日本風キムチだから口に合わないと言う。漬かり方が浅く甘いらしい。しかし母のキムチは、長らく日本産の野菜と日本の食品会社の調味料を使い、大阪の生活の中

「おいしいキムチを漬けることがいい結婚ができる条件。上手になったらぜひ連絡してきて」。

### 在日社会の男尊女卑への反発

在日コリアンの差別撤廃運動に参加したのも一九八〇年代であった。その運動を通じて国際社会での人権の考え方に会う。人は誰もが—居住国の国籍があってもなくても、性・年齢・肌の色等一切の属性にかかわらず—人とし

で漬けたものである。ソウルのキムチの味も知らなければ、韓国産食材も手軽に求められなかったのだ。今や韓国の本場の料理やおしゃれなコリアン創作料理本が書店に並ぶ。だからこそ母たちが在日女性が厳しい生活の中で自分たちの食文化を作り続けてきたことにもっと光が当てられていいはずだ。が、エラそうには言えない。私の手もキムチを漬ける術を知らないのだ。まず私にできることは二世の母の世代の料理を記録することである。できれば孫の息子には祖母のキムチを体で覚えてもらいたい。相変わらずキムチは苦手だけれど、在日コリアンのキムチの作り手に尊敬と愛を覚えてやまないこの頃である。